

”歴史的ご縁

“がつなぐ”

新たなご縁

“

■泉佐野市とのご縁

去る1月30日、泉佐野市（大阪府）と当市との間で、「歴史的ご縁が結ぶ 地域産業の活性化協力協定」を取り交わしました。

「なぜ泉佐野市と協力協定を結ぶことになったのか？」と疑問に思う方もいるでしょう。答えは協定の表題にあります。それは当市と泉佐野市とに深い「歴史的ご縁」があったからです。

江戸時代のことになります。和泉国佐野浦（現在の泉佐野市）に食の野家という廻船問屋を営む豪商がいました。一方、にかほ市平沢にも、当時の仁賀保領のみならず、由利地域一帯の蔵米などを手広く商う廻船問屋、斎藤市兵衛家（現在の榎飛良泉本舗）がありました。大きな北前船を持つ食野家は、由利地域一帯の蔵米を斎藤市兵衛家から買い付けるなどして巨財を築いていきました。

他方で、斎藤市兵衛家も、出羽において、豪商食野家の出張所役割を担うことで、財力と信用力を高め、仁賀保家を経済的に支えていったわけです。言うなれば両地域の発展と繁栄において、食野家と斎藤家は切っても切れぬ仲、分かち難いパートナーだったのです。

■国立極地研究所とのご縁

去る2月14日、国立極地研究所と当市との間で包括連携協定を締結しました。

皆さんにとって、国立極地研究所という名前はあまり馴染みのないものだと思います。けれども、当市にとってはたいへんゆかりの深い機関なのです。

同研究所は、オゾンホールを発見するなど、数々の国際的な研究成果をあげている、南極、北極を研究する国内最高峰の機関であり、南極観測隊を組織し、派遣する組織でもあります。

当市は、これまでも同研究所から白瀬南極探検隊記念館の調査・研究事業のみならず、市民への教育活動に対し協力をいただけてきました。

両者の縁については一つのエピソードがあります。白瀬轟が同研究所のスタートに大変重要な役割を果たしていたという事実です。

それは、戦後日本が南極条約に参加しようとしたときのことです。敗戦国日本への冷たい空気感がありました。それを一掃したのが、白瀬南極探検隊が残してくれた実績だったのです。

■今後について

前述したように、国立極地研究所とは、これまでも多分野にわたり連携してきました。例えば今あるものとして、南極昭和基地で使われている縦型風車の実験機が、南極の気象条件に近い仁賀保高原に設置されています。また、多くの南極観測隊OBの方々から市民講座の開催にご協力いただいております。今回、協定を締結したことで、これらの活動がさらに飛躍することが期待されます。

泉佐野市とは産業面で協力していくことを約束しています。まずは出来ることからですが、一つは泉佐野市内にあるアンテナショップや関西国際空港内に、当市の特産品を陳列していただくようお願いしています。また、両市がそれぞれのイベントなどに参加しながら、ともにPR活動を行うなどして、相互交流を活発に行きたいと考えています。



にかほ市長
市川雄次

